

球磨川流域における歴史的農業水利施設の利活用に関する研究

熊本大学大学院 ○学生会員 園田一樹
熊本大学 正会員 田中尚人

1. はじめに

日本全国の土地改良区が維持管理業務を担う歴史的農業水利施設が、「世界かんがい施設遺産」や「疎水百選」などの登録・認定を契機として、価値の再認識をされ始めている。しかし、歴史的農業水利施設の価値の認識は、水利用者や管理者等の「農業」関係者に限定されており、地域住民までにはその魅力が十分浸透していないことが考えられる。

そこで本研究では、球磨川流域に存在し、平成26年度に「世界かんがい施設遺産」に登録された「幸野溝・百太郎溝水路群」を中心とした地域を対象とし、地域住民の理解促進には、歴史的農業水利施設を「教育」と「観光」に活用することが課題解決の鍵であると考え、地域資源の面から見た歴史的農業水利施設の利用と活用の現状及び課題を明らかにすることを目的とした。

2. 地域資源の分類

本研究の目的である歴史的農業水利施設の利用と活用の現状および課題を明らかにするうえで、施設が地域内においてどういう存在なのか整理する必要があると考え、地域資源の分類を行った。

表-1 地域資源の分類(筆者加筆修正)¹⁾

資源分野	資源項目
人財	人、出会い・交流、知財
歴史・文化	伝統文化、生活文化、行祭事、偉人、史跡・社寺
産業	既存産業、企業、技術、生産物・特産品
自然・環境	自然、景観、農林空間、生活空間、水、動植物
活動	身体型娯楽、心理型娯楽、教育、休息・飲食
機能	インフラストラクチャー、レジャー施設、知的・文化施設、産業施設

表-1より、地域資源は6つの資源に分類され、歴史的農業水利施設は「機能」の「産業施設」に該当するとした。そこで、利用と活用の現状及び課題を明らかにするために、ワークショップ(以下WS)を行い、地域住民が考える地域資源に関する意見収集及び、地域内における「農業」「教育」「観光」の関係各所に対して、ヒアリング調査を実施した。

3. 資源的視点から見た歴史的農業水利施設の現状

地域住民が考える地域資源を明らかにし、歴史的農業水利施設がどう認識されているのか明らかにするため、WSを9月30日(月)14:00~16:00に実施した。参加者(地域住民31人、行政職員10人、大学関係者7人)を7グループに対して、10分×3ラウンドのワールドカフェ形式で「地域の良いところ」に関する自由記入を実施し、113例の自由回答を収集した。

収集した自由回答を品詞ごとに分けた結果、153語が調査対象に該当した。そこで、該当語を地域資源における6つの資源項目(人財、歴史・文化、産業、自然・環境、活動、機能)に分類した。²⁾

表-2 資源分野の分類結果

人財		産業		活動	
人	3	既存産業	7	身体型娯楽	11
出会い・交流	12	企業	0	心理型娯楽	0
知財	3	技術	0	教育	0
		生産物・特産品	45	休息・飲食	0
合計	18	合計	52	合計	11
歴史・文化		自然・環境		機能	
伝統文化	2	自然	23	都市施設	4
生活文化	5	景観	7	レジャー施設	7
行祭事	1	農林空間	2	知的・文化施設	0
偉人	1	生活空間	4	産業施設	6
史跡・社寺	4	水	6		
		動植物	0		
合計	13	合計	42	合計	17

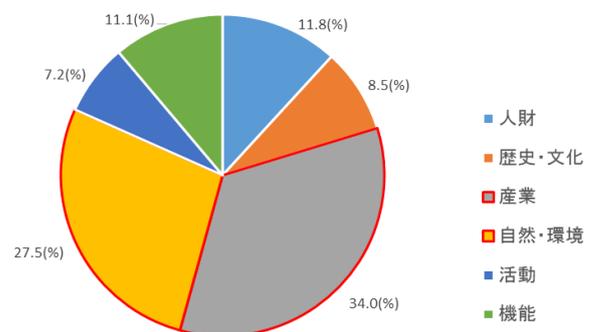


図-1 資源分野の割合

表-2及び図-1より、「産業」分野と「自然・環境」分野の2分野で61.5%もの割合を占めたことから、以上2点に着目し、焦点を当てた。

「生産物・特産品」項目に関しては、対外的にもブランド力のある球磨焼酎、メロンやいちごなどの果

物が多くを占めた。また、「自然」項目に関しては、記入内容に統一性は見られなかったが、雲海(霧の別称)に関する記入が比較的多かった。以上より、対外的にも知名度のあるものが地域資源として選ばれやすい傾向にあることが考えられる。

「機能」分野の「産業施設」項目に分類される歴史的農業水利施設(幸野溝や百太郎溝など)に関する記入は、「機能」分野においては35.3%であるが、地域資源全体では3.9%に収まったため、地域住民が考える地域資源として、十分に認知・活用されていないことが考えられる。

4. 関係者から見た歴史的農業水利施設

ヒアリング調査を表-3の人物に対して、40分程度実施した結果を以下の表-4に整理した。

表-3 ヒアリング調査対象詳細

3主体	所属	役職	対象
農業	幸野溝土地改良区	事務局長	I氏
	百太郎溝土地改良区	事務局長	N氏
教育	熊本県立南稜高校	教諭	S氏
	錦町役場 教育振興係	職員	T氏
観光	あさぎり町役場 商工観光課	職員	N氏
	多良木町役場 企画観光課	職員	U氏

利用に関する特徴として、施設の維持管理業務に追われているだけでなく、施設の老朽化や農業従事者の高齢化、後継者不足により、今後農業自体が立ち行かなくなる危険性を有していることが明らかとなった。また、活用に関する特徴として、3主体が協力して施設の活用(地域学習やグリーンツーリズム)を実施しているが、継続的な予算の確保が困難であることや主体間の希薄な関係性を理由に継続して実施できていないものが多いこと。また、共通発

言として、当たり前ものに価値づけを行い、地域で共有する必要があることが明らかとなった。

現状の「農業」「教育」「観光」の3主体および利用と活用の現状を以下の図-2に整理した。

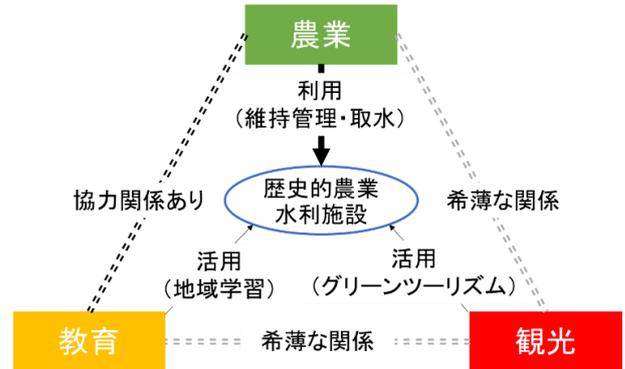


図-2 現状の各主体と歴史的農業水利施設の関係

5. おわりに

本研究では触れなかった地域住民との関係性の明示や他の歴史的農業水利施設を中心とした地域との比較を行うことで、本研究における目的の更なる理解と発展に繋がると考えられる。

謝辞

本研究にご協力いただいた、熊本県水土里ネット連合をはじめとする関係者各位の皆様深く感謝の意を表します。

参考文献

- 1) 尾家建生, 金井萬造: これわかる! 着地型観光 地域が主役のツーリズム, 株式会社学芸出版社, pp20-21, 2008. 11. 10.
- 2) 樋口耕一: テキスト型データの計量的分析-2つのアプローチの峻別と結合-, 理論と方法 Vol. 19(1), pp101-115, 2004

表-4 関係者へのヒアリング結果

質問	発言者	発言内容
利用に関して	農業関係者	<ul style="list-style-type: none"> ・現状では、施設の維持管理業務で手一杯であり、他に手が回らない。 ・施設の老朽化や農業従事者の高齢化、後継者不足による減少、農作物の価格低迷などの問題が山積みであり、負担増加により悪循環に陥っており、このままでは将来的に農業が成り立たなくなる可能性がある地域が多いと考えられる。 ・多面的支払交付金により、地域住民参加型の活動(草刈りや泥上げ等)を実施し、水路(支線)の維持管理が成り立っているとっては過言ではない。
	農業関係者	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の小学校からの依頼で、小学生に対して幸野溝(百太郎溝)に関する歴史学習を定期的に実施している。 ・田んぼの学校(農業体験や泥遊び)を南稜高校と一緒にやっている。 ・溝を観光案内ルート(寺社仏閣、観光スポット等)の一部に利用してもらうようになった。 ・様々な主体からなる「幸野溝・百太郎溝を活かす会」を設立したため、今後は活動を増やしていく予定だが、継続的な活動や組織の維持には予算の確保が必要不可欠。 ・幸野溝はグリーンツーリズムの活動の一部に入れてもらえるようになった。
活用に関して	教育関係者	<ul style="list-style-type: none"> ・地域学習の一環で、百太郎溝や幸野溝を取り上げているが、主役は他の歴史的施設。そのため、幸野溝や百太郎溝に関する感想はほとんど見られない。 ・他の課や組織と協力したいが、主となる組織が無いので、現状では実施できていない。 ・子供たちのカリキュラムが忙しく、地域学習の時間を増やすことは困難。 ・各主体と協力し、フットパスを実施したが、学校で予算確保することができず、2年で終了した。
	観光関係者	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の高校や土地改良区と共同で、フットパスやグリーンツーリズムを実施した。(数回のみ) ・観光運用する上でメリットとデメリットを理解し、地域住民とコンセンサスを取る必要がある。 ・アクティビティへの運用を計画しており、民間会社や土地改良区と協議段階。 ・歴史的農業水利施設の恩恵を受けた野菜というような付加価値をつけて外部に売り出していきたい。
	共通	<ul style="list-style-type: none"> ・施設を価値あるものと認識できていないため、まずは価値づけを行い、住民に理解・共有してもらう必要がある。 ・活用には、イベントの参加費や施設利用費等を集める仕組みづくりを行う必要がある。